

「粗末なもので、お恥すかしいのですが」と、言いながら贈り物を差し上げる習慣が、とても不思議だったと、私の本を英訳してくださっているカナダ出身の翻訳家の平野キャシーさんに言われたことがあります。

「いまは、どういう意味でそういう言い方をしているのかわかるけれど、初めて日本に来た頃は、え？　なんで、贈ったら恥ずかしいような粗末なものを贈るの？　私たちは、素晴らしい物だから、あなたにあげたくて、と贈るのに、と思ったわ」

これには、はっとさせられました。何かを差し上げるときの心の持ちようひとつにも、文化の違いがあるのだなあ、と気づかされたのです。

物をあげたり、もらったり。贈与と交換は、私が学んできた文化人類学では、ずっと大切にされてきたテーマですが、人と人との間をつないでいく「物」たちは、あからさまには表現されない様々な感情を伴ってやりとりされていて、だからこそ、文化によって作法が違おうと、むむ？　なんで？　と不思議に思われることもあるのでしょうか。

その点、お金、というのは、「剥き出し」で、そこに込められている意味は実にシンプル



絵・江口修平

## ポチ袋のきもち

上橋菜穂子

です。そのせいか、文化が違ってても、そこに付与される感情や象徴も、似通っている気がしますが、「お金」もまた、文化の影響を免れているわけではありませんよね。

私は子どもの頃から、母が、他人さまにお金を差し上げるとき、封筒やポチ袋に入れるのを見て育ちました。咄嗟とっさの事で手元に適当な封筒やポチ袋がないときは、母はティッシュにお札を包んで、「このような形で失礼でございますが」と、一言添えながら渡していました。

お金の「剥き出しの合理性」が、母には、あからさま過ぎると感じられたのでしょうか。親戚の子どもにお小遣いをあげるとき、あるいは、労働の対価以上に、ちよつとした心づけをしたいときに、お金をポチ袋の中に入れて、あからさまでないようにしてから渡す。ポチ袋には、私たちの心に生まれるためらいを和らげるクッションのような役割が秘められていて、お金は、そつと衣まとを纏まとわせることで、ようやく、人に渡してよい物に変わる。

こういう他者との「やりとり」の小さな習慣の中にも、意外に深い、様々な意味の糸で織りなされたものが潜んでいるようです。



うえはし・なほこ●作家、文化人類学者。東京都生まれ。立教大学大学院博士課程単位取得。文学博士。オーストラリアの先住民アボリジニを研究。現在、川村学園女子大学特任教授。1989年『精霊の木』で作家デビュー。主な著書に『精霊の守り人』をはじめとする「守り人」シリーズ、『狐笛のかなた』『獣の奏者』『鹿の王』など。2014年国際アンデルセン賞作家賞、2015年本屋大賞受賞。